

# 資聖寺道液による天台文献の依用について

松 森 秀 幸

## 1. はじめに

資聖寺道液（生没年未詳）に関して筆者は、現存する資料から、この人物が不空（705-774）や般若（-781-810-）の訳経集団の一員として、唐中期の長安仏教界において重要な役割をになっていた僧侶であり、彼の製作した『浄名経集解関中疏』（以下、『関中疏』）や『浄名経関中釈抄』（以下、『関中釈抄』）が、唐中期の長安において天台宗がどのように理解されていたのかを知るうえで極めて重要な文献であることを指摘した（松森〔2014〕を参照）。

道液集『関中疏』は、僧肇撰『注維摩詰経』（以下、『注維摩』）から鳩摩羅什（350-409頃）・僧肇（374-414）・道生（355-434）の注釈の一部を取り出したものに、さらに現行の『注維摩』には収録されていない僧叡（378-444）と智顛（538-597）の注釈、ならびに道液自身による科文と彼の注釈とを加えた著作である。また道液撰集『関中釈抄』は、『関中疏』に対する注釈書である。これらの文献には「天台」に対する言及が散見され、智顛の著作からの引用と推定される文が確認される。本稿では、これら『関中疏』と『関中釈抄』において「天台」と言及される箇所を中心に考察し、資聖寺道液の著作における「天台」という表現の意味について明らかにしたい。

## 2. 『浄名経集解関中疏』における引用文献とその特徴

はじめに、『関中疏』における「天台」に対する言及箇所について確認したい。『関中疏』には「天台」に対する言及が十箇所あり、そのうち九箇所が「天台云」ではじまる天台文献の引用である。『関中疏』は、内容面から見れば、『注維摩』の僧肇の注釈を中心に、現行の『注維摩』の鳩摩羅什・道生の注釈、現行本『注維摩』に未収録の僧叡と智顛（「天台」）の注釈、道液自身による『維摩経』の科文と注釈とが加えられている。道液は本書の序文において、「浄名以肇注作本、法華

## (12) 資聖寺道液による天台文献の依用について (松 森)

以生疏為憑，然後傍求諸解」(卷上，T85.440a25-26)と述べていることから，道液は鳩摩羅什や他の鳩摩羅什門下の注釈よりも僧肇の注釈を重視していたことがわかる。これは『関中疏』卷上が「維摩詰經序 釈僧肇作」(T85.440b1)とはじまり，僧肇の經序の全文をそのまま収録している点からも明らかである。

僧肇の『維摩經』注釈に関しては，僧祐(435-518)の『出三藏記集』卷十五に「関中沙門僧肇始注維摩，世咸翫味。及生更發深旨顯暢新異，講学之匠咸共憲章其所述。維摩・法華・泥洹・小品諸經義疏，世皆宝焉」(道生法師伝第四，T55.111b3-6)とあることから，僧肇の注釈は古い時代から最初の『維摩經』注釈として注目を集めていた。また7世紀後半から8世紀初期に書写されたと推定される僧肇の『維摩經』注釈の単行本のテキストが敦煌やトルファンで出土していることから(花塚[1982,206]，池田[2000,9]を参照)，僧肇の注釈は，少なくとも『関中疏』が成立する唐中期まで，『維摩經』の注釈書として高い地位を保ち続けていたことが推定される。道液が僧肇の注釈を重視したのも，こうした流れを継承したものであろう。

また，『関中疏』には，鳩摩羅什や道生，僧叡などといった，鳩摩羅什とその門下の注釈も引用されているが，道液はそれらの注釈を「傍求諸解」と述べ，副次的な解釈とみなしている。当然，「天台」として言及される智顛の注釈も，「諸解」の一つとして位置づけられているのである。

ただし，僧肇の注釈を重視し，鳩摩羅什や他の鳩摩羅什門下の注釈を「傍」として採用することと，智顛の注釈を「傍」として採用することとは，事情がかなり異なっている。すなわち，ほぼ同時代に成立したと考えられる鳩摩羅什とその門下の『維摩經』注釈のなかから，僧肇の注釈という特定の注釈を重視して取りあげることと，それらの成立からかなり時代が下った智顛の注釈を，翻訳者の鳩摩羅什本人や彼の門下の注釈と対等の注釈として採用することとは，その意味は異なってくるのである。つまり，鳩摩羅什門下と並んで智顛の注釈が「諸解」として採用されていることは，智顛の『維摩經』注釈が，唐中期において鳩摩羅什門下の『維摩經』注釈に匹敵する権威を持っていたか，あるいは道液によってそのような権威のある注釈とみなされていたことを意味している。そして，そのいずれの場合にあっても，道液が唐中期の長安仏教界の有力な僧侶であったことを考慮すれば，当時において智顛の『維摩經』注釈には，一定の権威が認められていたといえることができる。

しかし，『関中疏』の智顛の注釈に対する扱いには，僧肇や鳩摩羅什，他の鳩摩

羅什門下たちの注釈に対するそれとは大きく異なる特徴がある。すなわち、道液が僧肇らの注釈に言及する箇所は、現行本の『注維摩』をほぼそのまま忠実に引用しているのに対して、「天台」に関する言及はそのすべてが智顛の『維摩經文疏』(以下、『文疏』)を要約したものか、現行の天台文献に類似の表現が確認できない内容のものである。

たとえば、『関中疏』卷上には次のような「天台」に対する言及がある。

(a) 「時我、世尊、聞此茫然、不識是何言、不知以何答、便置鉢欲出其舍」此第三置鉢也。(b) 天台云、「進非其敬、退非其悲、故置之也」。(c) 肇曰、「淨名言逆而理順、善吉似未思其言、故不識是何說、便置鉢而出也」(T85.459c21-25, 引用文中の記号、下線は筆者による)

この段の中の下線部 (a), (c) は、『維摩經』と『注維摩』をほぼ忠実に引用したものである(『維摩經』弟子品, T14.540c12-13, 『注維摩』卷三, T38.352b6-7)。一方、下線部 (b) は、『文疏』卷十三 (X18.563c7-9)を要約したものと考えられる。

また、天台文献に類似の表現が見られない例としては、たとえば『関中疏』卷上に次のような注釈がある。

天台云、「懺悔法有三。一者戒門、依律法懺是。二功德門、謂礼仏・誦經・般舟方等道場法是。三無生門、令悟罪性空。若達罪性、与福無異是也」(T85.462b23-26, 下線は筆者による)

ここと同様の『維摩經』本文に対応する『文疏』の注釈は次の通りである。

今明懺悔罪滅有三種。一作法懺、除滅違無作罪。此是毗尼明懺悔法也。二觀相懺悔、除滅性罪。此依定門明懺悔也。三觀無生懺悔、除滅妄想根本罪。此依慧門懺悔也。復次、違無作罪障戒、性罪鄣定、根本罪鄣慧。一作法懺悔滅違無作罪者、如律明諸治羯磨等懺罪方法……二觀相懺者、如諸大乘方等經所明行法見罪滅相……三觀無生懺者、此觀成時、能除根本妄惑之罪……(卷十五, X18.573a17-b12, 下線は筆者による)

道液の挙げる三種の懺悔法と『文疏』の内容とは完全には一致していない。

以上のように、『関中疏』における僧肇や鳩摩羅什、その門下の注釈の引用は、現行の『注維摩』とほぼ一致するのに対して、「天台」と言及される引用内容は、智顛の『文疏』の要約と考えられる内容ではあるが、現存するテキストと完全に一致することはない。

道液が引用する鳩摩羅什とその門下の注釈が現行の『注維摩』とほぼ一致するのは、道液がそれらの注釈を採用する際に参照した文献が、現行の『注維摩』とほぼ異同のないテキストであったことを示唆している。『注維摩』がいつ現行の形

## (14) 資聖寺道液による天台文献の依用について (松 森)

で成立したのかは明らかでないが、湛然 (711-782) の『止観輔行伝弘決』卷十之一に、「言出羅什疏等者，什公無別浄名疏。但有与生肇等諸徳注経」(T46.436b6-7) とあることから、少なくとも湛然の時代には鳩摩羅什とその門下の注釈を並記する現行本のような形式の『注維摩』のテキストが流布していたと考えられる (木村 [1995, 81-83] を参照)。したがって、湛然より活躍の時期がやや下った、ほぼ同時代人である道液が、現行本のような『注維摩』を目にしていたという可能性は高い。

一方、「天台」と言及される文献が現存の智顛の『文疏』のテキストと一致しないという問題については、道液は文献を忠実に引用したが、それが現存のテキストとは別の系統のものであった場合、道液が独自の理解に基づき智顛の注釈を要約した場合、道液が参照したのはそもそも智顛ではなく別人の著作であった場合などが考えられる。いずれの場合であれ、道液が言及する「天台」の注釈は、智顛の『文疏』と一定の関連性が認められる解釈である。また「天台意云」(卷上, T85.459a7) という表現もある以上、この箇所以外に参照した文献をある程度忠実に引用している可能性がある。

## 3. 『浄名経関中釈抄』と天台文献の依用

道液撰集『関中釈抄』は、十八箇所において「天台」に言及している。これらのなかで冒頭の三箇所は経題解釈部分にあたり、智顛の『維摩経玄疏』を要約した内容である。また十八箇所のうち「天台云」という引用の形式で言及されるのは十箇所である。これらの箇所は、『関中疏』と同様に現行の天台文献をそのまま引用したものではなく、『文疏』を要約した内容と推定されるものである。以下、本稿では上記の「天台云」という形式以外で「天台」が言及される箇所を取りあげ、本書の特徴を明らかにしたい。

まず注目したい箇所は、本書にみられる「関中天台皆云」という表現である。これは『維摩経』卷上、弟子品において、律を犯した二人の比丘に説法する優波離に対して維摩詰が「無重増此二比丘罪」(T14.541b16) と述べたことに対する注釈のなかに見られる。

「重増」者、小乗懺法，要深見罪累，起重悔心，等言滅也。故関中・天台皆云，以背真妄犯，若為罪垢，志誠悔懼，復名重増。(T85.521a19-22)

この「関中天台皆云」とは、「関中」と「天台」の二つの注釈がいずれも同様の

解釈を取っていることを示したものである。これは『関中釈抄』に「関中」と「天台」の解釈を対比して述べている次のような論述形式を踏まえれば明らかである。

「邪見・彼岸本性不殊」者、此三句、関中意以非邪・非正・非難・非惱・非淨為平等。故可取食。天台意以呵善吉汝二乘偏空是邪見，非中道彼岸。(T85.520b3-6, 下線は筆者による)

引用文冒頭の「邪見・彼岸本性不殊」とは、『維摩経』の「若須菩提入諸邪見，不到彼岸…」(T14.540c4f-)に対する僧肇の注釈(T38.351b12)であり，この引用文全体は、『関中疏』が僧肇の注釈を引用している箇所に対する注釈である。したがって，ここの「関中意」とは僧肇の注釈を指しており，僧肇の注釈と対比される形で「天台意」が取りあげられていることがわかる。道液が「関中」と「天台」を有力な注釈として対比していることは，上記の引用箇所続く注釈にも，『無淨・福田・墮謗』等言，二家不同，類此可見」(T85.520b16-17)とあることから明らかである。このように道液においては，「天台」(智顛)の『維摩経』注釈は僧肇に匹敵する一家として認識されていたのである。

次に『関中釈抄』が『維摩経』本文や『注維摩』ではなく天台文献の引用箇所に対して注釈している箇所を確認したい。

「二縁修觀有出入之間」者，此真修縁。出梁齊法師所用，其能深妙也。故天台用之。(卷下，T85.523b3-5)

上記の引用文中で注釈対象として取りあげられる「二縁修觀有出入之間」という文は、『関中疏』のなかで「天台云」として引用される内容の一部である。この『関中疏』の天台の引用は、『文疏』の「二諸方便教並明縁修照寂有入出觀」(X18.600a13-14)を要約したものと考えられる。上記の『関中釈抄』の引用文では、『関中疏』において引用される『文疏』の内容が梁齊法師の説を採用したものであることが指摘されている。ここで注目したいのは、『関中釈抄』が『関中疏』において引用される天台文献をほぼ正確に引用していることである。道液は『関中疏』において僧肇らの注釈を正確に引用し，智顛の注釈は現行のテキストとはかなり異なる表現で引用していた。これは『関中釈抄』が「天台云」として直接的に智顛の注釈を引用する際にも共通する特徴である。しかし，上記の例のように『関中釈抄』が『関中疏』から間接的に智顛の注釈を引用する場合には，『関中釈抄』は現行の智顛の注釈ではなく，『関中疏』に引用された形の智顛の注釈をほ

## (16) 資聖寺道液による天台文献の依用について (松 森)

ほ忠実に引用している。これは両書の撰号からみれば、ある意味で当然のことともいえる。すなわち、現行の『関中疏』の撰号は「道液集」とあることから、『関中疏』はあくまで『維摩経』注釈集とみなされており、一方で、『関中釈抄』の撰号は「道液撰集」とあることから、『関中釈抄』は道液の著作とみなされている。したがって、これらの点を考慮すれば、『関中釈抄』は注釈対象をただ忠実に引用しただけに過ぎないのかもしれない。しかし、もし『関中疏』が『維摩経』の注釈集として純粹に諸注釈を集めた著作であるならば、そこに引用される智顛の注釈もかなり忠実に引用されていたという可能性も否定することはできない。いずれにせよ、本書と『関中疏』との関係から、道液においては智顛の『維摩経』注釈が一定の權威を持った注釈として重要視されていたことが確認できる。

## 4. むすびに

以上、本稿では資聖寺道液の『維摩経』注釈における天台文献への言及箇所を取りあげ、道液において「天台」がどのように認識されていたのかを確認した。唐中期の天台宗に関しては、中興の祖と称される荆溪湛然が有名であるが、道液は湛然とほぼ同時代に長安で活躍した僧侶であり、彼の天台に対する言及は唐中期の天台宗という存在の実状を明らかにする上で重要である。今後は、『維摩経略疏』・『維摩経疏記』などといった湛然の『維摩経』に関する著作との関係も視野に入れ精査していく必要があるだろう。

## 〈参考文献〉

- 花塚久義 1982 「注維摩詰経の編纂者をめぐって」『駒澤大学仏教学部論集』13: 201-214.  
 木村宣彰 1995 『注維摩経序説』真宗大谷派宗務所出版部。  
 池田宗讓 2000 「解題」大正大学総合仏教研究所注維摩詰経研究会編著『対訳 注維摩詰経』山喜房仏書林。  
 松森秀幸 2014 「『浄名経関中釈抄』と『天台分門図』」『印度学仏教学研究』63 (1): 494-489.

〈キーワード〉 長安仏教, 中国天台宗, 道液, 『浄名経集解関中疏』, 『浄名経関中釈抄』  
 (創価大学助教, 博士 (人文学))